

2020年9月20日
聖霊降臨後第16主日
東京聖三一教会

ヨナ書 27:30-28:7
フィリピ 14:5-12
マタイ 20:1-16

ひたすらキリストの福音にふさわしい生活をおくりなさい

司祭 シモン 林永寅

私たちは主の祈りを通してこのように祈ります。

「み国が来ますように」

ところで、多くの人々はこの祈祷文は、いつか叶えられるであろう希望を祈るものであると思っていることでしょう。もちろん、「天の国」はいつか叶えられる私たちの希望です。しかし、この祈祷文は私たちの召命を確認するものでもあります。即ち、この祈祷文の中には、「この世に天の国が成し遂げられるために努力しながら生きていかなければならない」という意味が込められています。そして、「私たちを、天の国のための器として使ってください」という願いも込められています。

先日の説教でも短く申し上げましたが、「天の国」とはこの世に神様のみ言葉が実現するということです。イエス様はこれが、病を患っている人々が回復し、傷ついている人々が癒される世界、縛られている人々が解放され、抑圧されている人々が自由になる世界である、と教えてくださいました。ですから、天の国とは、皆が共に幸せに暮らすことができる世界であるということが分かります。また正義の世界であるとも言えるでしょう。

イエス様は、今日一緒に読んだ福音書を通して「天の国」についてお話になりました。けれども、福音書を読んだ方の中にはこのように思っている方もいらっしゃるかもしれません。

「ぶどう園の主人が自分の思いのままに行うことがはたして『天の国』であり、『神の正義』であるのか。『天の国』がこのように不公正でもいいのか。」

信仰を持っていない方はこのイエス様の喩話を、理解することはできますが受け入れることは難しい、と思っています。自分がまる一日働いた人と同じ立場だったら、ぶどう園の主人の仕打ちが不公平であると思うかもしれません。それでは、どうしてイエス様はこのようにおっしゃったのでしょうか。福音書の内容をもう一度見てみましょう。

ぶどう園の主人が働く労働者を雇うために夜明けに出かけました。広場には人々がたくさん集まっていた。ぶどう園の主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送って仕事をさせました。ぶどう園の主人が9時ごろに広場に行ってみると、その時にも何もしないで広場に立っている人々がいました。ぶどう園の主人は、彼らもぶどう園に送って仕事をさせました。その後12時ごろ、3時ごろ、5時ごろにも何もしないで広場に立っている人々がいたので、彼らもぶどう園に送って仕事をさせました。夕方になり、ぶどう園の主人は労働者たちに賃金を払いました。問題はこの時起こりました。まず、午後5時ごろに来た人に一デナリオンをくれました。すると朝早く来た人はもっともらえるだろうと思っていました。平凡な人なら皆そのように思ったでしょう。ところがぶどう園の主人は皆に一デナリオンずつ賃金を払いました。するとこのように不平を言い出しました。

「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いた私たちと、この連中とを同じ扱いにするとはいけません。」(12)

これはおそらく朝早く来た人の声でしょう。本当にまる一日、暑い中を辛抱して働いた人としては不満しかありません。ぶどう園の主人の仕打ちは正義ではありません。公平でもありません。イエス様はなぜこのような不正義と

不公平を「天の国」の喩話としておっしゃったのでしょうか。「天の国」は本当にこのようなもののでしょうか。

私たちはまず広場にいた人々の様子に注目する必要があります。ぶどう園の主人は彼らにこのように聞きました。

「なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか」(6)

すると彼らはこのように答えました。

「だれも雇ってくれないのです」(7)

聖書にはこれらの人々の様子を、「何もしないで広場に立っている人」と記されています。けれども、彼らは失業者だったのです。

また、ぶどう園の主人が約束した一デナリオンという賃金についても注目してみましょう。この一デナリオンは、当時の労働者の1日の賃金でした。このお金で家族がその日の糧を買うことができました。ですから、彼らが仕事ができなくなれば、そして一デナリオンをもらえなかったら、家族全員が飢えてしまうしかないのかもしれませんが、ですからぶどう園の主人は、午後5時ごろから働いた人にも、一デナリオンを払ってあげたのです。「天の国」と「神の正義」はまさにここにあります。現代社会ではこれを公的扶助また社会福祉と言っているのです。これは、イエス様が二千年前、今日の喩話を通して教えてくださったおかげであるとも言えるでしょう。それにもかかわらず、この世の中には、このような「神の正義」に対して反感を抱いている人々もいます。けれども、このような反感は神様のみ旨に逆らうことになる場合もあるのです。

今日ご一緒に読んだヨナ書のテーマも、神様の慈しみについてのことであり、「神の正義」についてのことでもあります。ヨナは、「ニネベに行って、悔い改めを宣べ伝えなさい」という神様のみ言葉に従いたくありませんでした。厄介な仕事だったからでしょうか。そうかもしれません。けれども、「ニネベがイスラエルを侵略して捕虜にして連れていたアッシリアの首都である」ということを知れば、話は変わります。ヨナは、侵略者の子孫に悔い改めを宣べ伝えたくなかったのかもしれませんが。もしかしたら彼らが罰を受けるのを願っていたかもしれません。それでニネベの正反対の方向であるタルシッシュ(現在のスペイン)に逃げようと思いました。けれども、巨大な魚(くじら)の腹の中に飲み込まれた後助かって、仕方なくニネベに行くことになりました。ヨナはニネベで悔い改めを宣べ伝えました。すると、王をはじめ、すべての民らが断食しながら悔い改めました。神様は彼らにくだそうとなさった災いをやめられました。ところで、神様のこのような行いにヨナはとても腹が立ちました。ヨナはこのように思っていたかもしれません。

「悔い改めをしたとしても、それが情状酌量にはなりますが、罪に対する罰は受けなければならないのではないのでしょうか。」

これはこの世の人々の正義と公平に対する考えでしょう。けれども、「神の正義」は異なります。「神の正義」とは、正しいことと悪いことに対する判断より、まず人々を束縛するあらゆるものから解放することです。そして、皆が神様によって創造されたもとの姿を持って自由に過ごすようになることです。神の正義は、神の愛の同じ意味なのです。それで神様はヨナにこのようにおっしゃったのです。

「どうして私が、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」(ヨナ 4:11)

最近コロナ禍によって破産したり、失業者したりして、苦境に陥っている人々が多くなりました。けれどもある政治家は、「このような状況はやむを得ないことであるから自己責任であり、自助すべきである」と言いました。この話に同意する人も多いです。けれども私にとってこのような話は、朝早くから働いていた人々やヨナの声のように聞こえます。信仰者だったら、まず神の正義を考えるべきではないでしょうか。私は、個人の自己責任より社会的責任

の方が神の正義に近いものであり、苦境に陥っている時支え合う社会が天の国に近いものであると思います。そして私は、最近社会の一部で議論されている「ベーシック・インカム」について関心を持つのも信仰者として「神の正義」についてもっと深く考えるようになるきっかけであると思います。

今日ご一緒に読んだフィリピ書にはこのように記されています。

「私は次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。」(フィリピ 1:27-28)

これは使徒パウロが、フィリピの教会が競争と利己心によって分裂したことを残念に思い、揺るぎない信仰を願う内容です。度が過ぎる競争と利己心は、人の心を分裂させることに留まらず社会まで分裂させます。そして天の国からだんだん離れることとなります。使徒パウロが話したこの「福音の信仰」は、天の国がこの世に成し遂げられるのを願う祈りと実践です。私たちが、天の国がこの世に成し遂げられるのを祈りながら生きていけば、神様は喜びになり、私たちを祝福してくださるでしょう。

この一週、「天の国」と「神の正義」がこの世に成し遂げられることを願う祈りと、信仰的实践を通して、神様の恵みと祝福が与えられますように心よりお祈りいたします。